

母乳
OPPAI

症候群
SYNDROME



さく:みずいろめがね

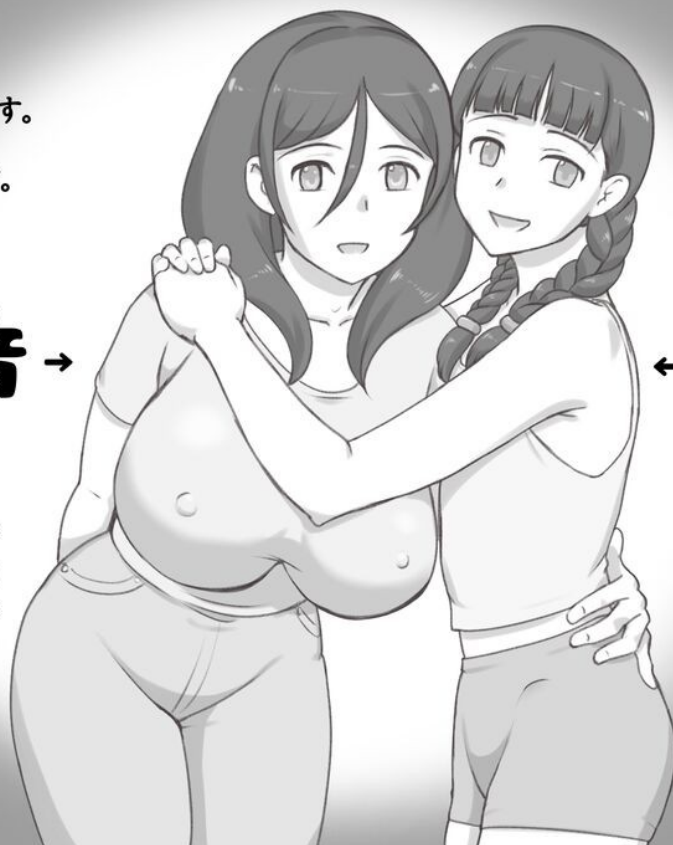
『母乳分泌過多症』

…ってご存知ですか？

そう、子供が乳離れした後も
お乳が勝手に出てしまう症状です。
おっぱいがパンパンに張って
雌牛のようになってしまいます。

かのん
歌音 →

バツイチママさん。
娘の歌恋と母子家庭。
大きな胸にたがわず
包容力があり
娘に甘い♡



← **歌恋**
かれん

歌音の娘。
物心ついてから母親にベッタリ。
恋愛に憧れるものの奥手。
いつか母親のような
胸になりたい♡

今日は、そんなオツパイを
持つ母親が、どうして娘と
恋仲になったのか、その
顛末をお話しましょう…♡

「…『プロラクチン分泌異常症?』」
聞き慣れない言葉に
歌音さんは戸惑いました。

最近、お乳が痛いほど
張るので違和感を
覚え、産婦人科を
訪れたのです。

「ええ。あなたは先天的に
母乳過多になりやすい
体質ですね」

「あの、それではどうしたら…
難しい病気でしょうか」
「いえいえ、そんなに心配する
ことはないですよ。
母乳をこまめに搾って
おけば大丈夫。
搾乳器をお出し
しますね」



(んっ… お乳を搾るのって
難しいのね)

キエウ…♡

ピュッ♡

フッフッ

ピュッ♡

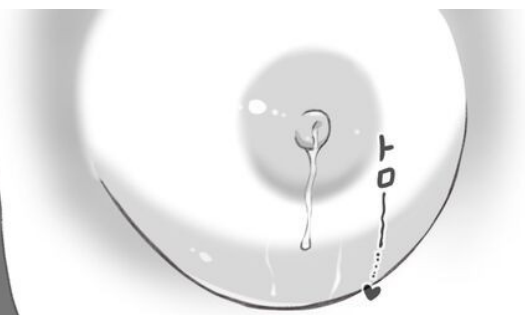
チャフンッ♡

「ただい〜… マッ!?
ママ、ナニそれ!?!」



「あ…お、おかえりなさい。
恥ずかしいとこ、見られちゃったかな…」

「へーっ、プロラクチン分…なんとか
っていうんだ。ママも大変だね」



歌恋ちゃんは
ママの乳首を
見つめると
ふいにお乳が
吸いたくなり
ました。

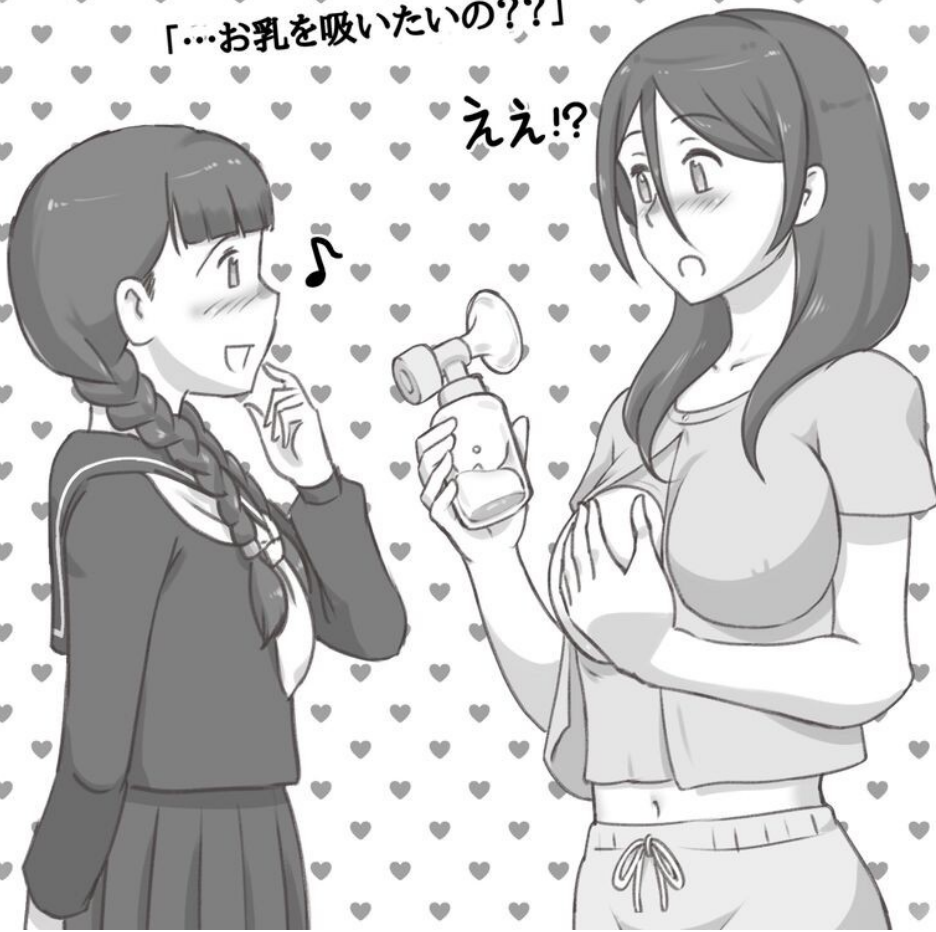
(このオツパイ
おいしそう…)



なんだかムズムズして
くるのです。

「...お乳を吸いたいの??」

ええ!?



● 歌恋ちゃんの申し出に
● ママさんは目をパチクリ。

● 「赤ちゃんの時以来だし、
● ひさしぶりに飲んでみたい
● なあ〜つて♥
● ねえ〜ん、いいでしょー？」

● (小さい子供じゃないのに...)
● とは思うものの、娘に頼まれ
● たら嫌とは言えない歌音さん。

● 「じゃ、じゃあ...どうぞ」

「あ〜ん♡」

雛が餌を求めるように突き出されたお口へ
母乳が注がれました。

キュツ、キュツ、と乳首を搾るたびに
白い液体が娘の口中へ
飛び込みます。

んっ...

(…な、なんだかイケないことを
してるみたい…♡)

ママさんは少しドキドキしました。

ギョウウツッ

ビュツ♡
ビュカーッ♡

んご♡



(んっ… 甘い♡)

歌恋ちゃんは思わずため息。

ママの母乳は
牛乳より薄い甘さ
ですが、とろみが
あり、なんとも
言えない
おいしさ。

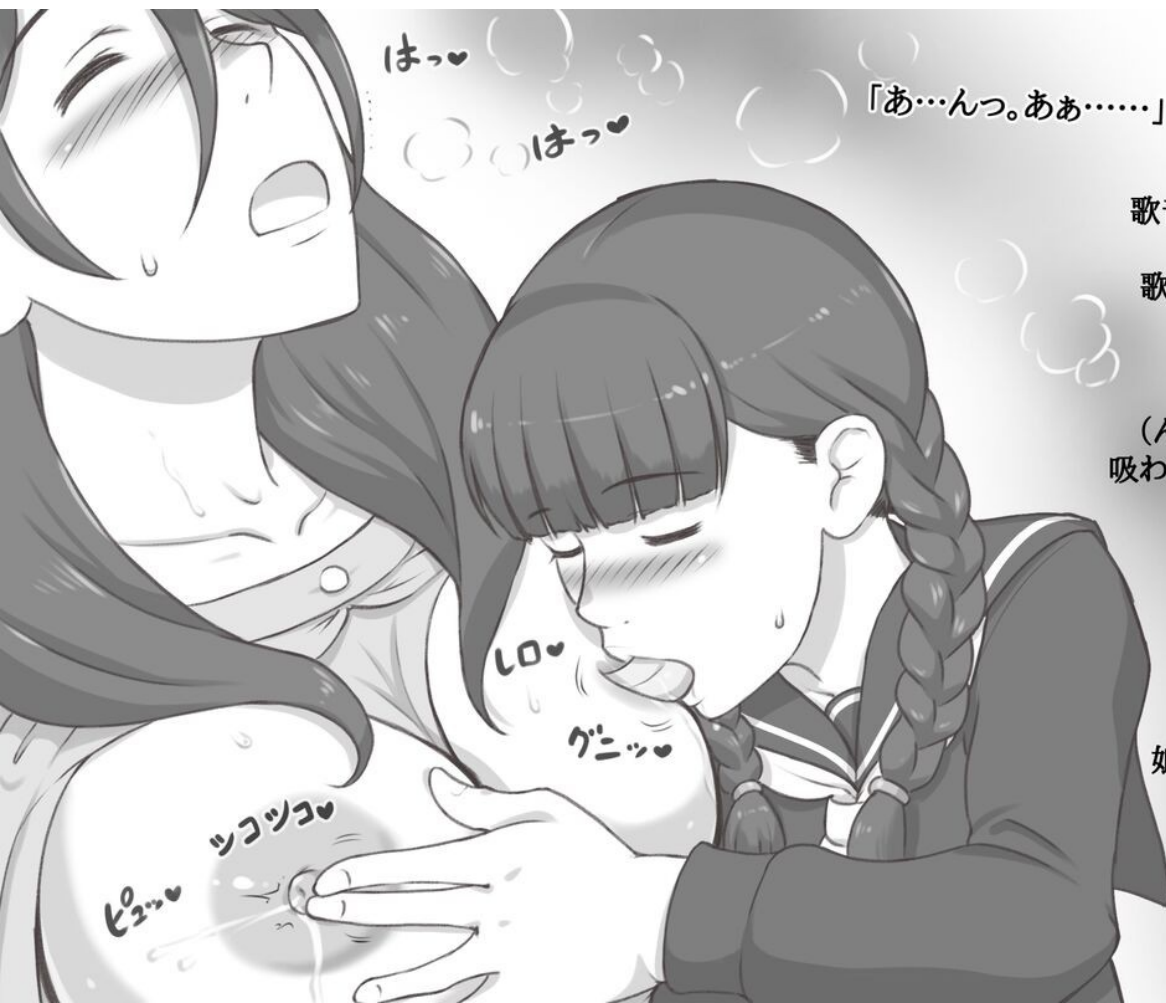
飲むと不思議に
体の奥がじわり
と疼くのです。



「あっ…歌恋ちゃん？」
「もっ、もう一度飲ませて♡
もう一度だけ、ねっ?…」

娘は母親の乳首にむしゃぶり
つき、本格的に吸い始めました。



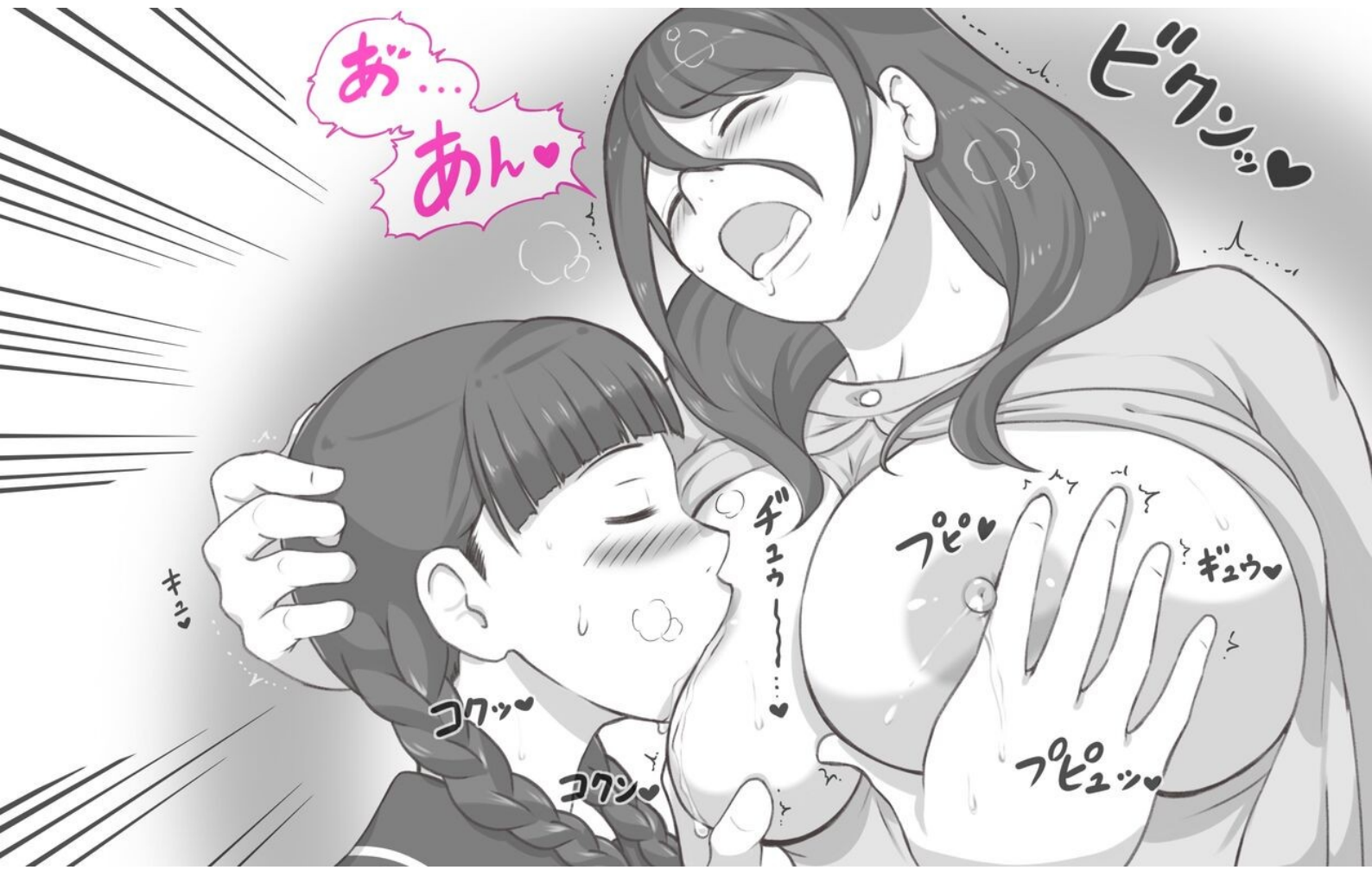


歌音さんの息づかいは少しずつ
荒くなってゆきました。
歌恋ちゃんから乳首を吸われる
たびに、ジンジンとそこが
痺れるのです。

(んくっ… まさか娘にオツパイを
吸われて感じちゃうなんて…っ♡)

でも体は正直…。
もう長い間他人に吸われた
ことのなかった乳首は
思った以上に敏感に
なっていました。

娘の方も次第に熱中してきて、
ごく自然に乳首に指を掛け
乳液を搾り取ろうと
無意識にまさぐる
のでした♡



「はぁ… はぁ…」
(変な声出ちゃった…)

乳首を強く吸われ
思わず軽いアクメに
襲われてしまった
歌音さん。

娘に淫らな声を聞かれ
羞恥に頬を染めます。

けれども歌恋ちゃんは
しごくご満悦。
母親の母乳を十数年
ぶりに堪能し、とても
満足そうでした。



「美味しかった、ママのオツパイ…♡
沢山飲ませてくれてありがとう」
「そ、そうなの？ それならよかったわ」

娘に吸われたせいか
あれだけダダ漏れした
母乳はすっかり止まって
いました。

(お乳が軽くなったわ。
やっぱり子供に
吸われる方が
いいのかしら…?)

ㄉㄉ♡

さてその翌日。

「…えっ、またお乳を吸いたいの？」
「うん。あのね、昨日のオツパイが美味しかったから…」
顔を赤らめながらおねだりする歌恋ちゃん。

(牛乳じゃないのだけど…)

とはいえ、今日もお乳が止まらない歌音さん。
乳房がパンパンに張って痛いので、いつでも搾乳できるように昔使っていた授乳服を引っ張り出したほどです。

娘の申し出はむしろありがたいのですが…

ワクワク♥

(ちょっと恥ずかしいかな…)

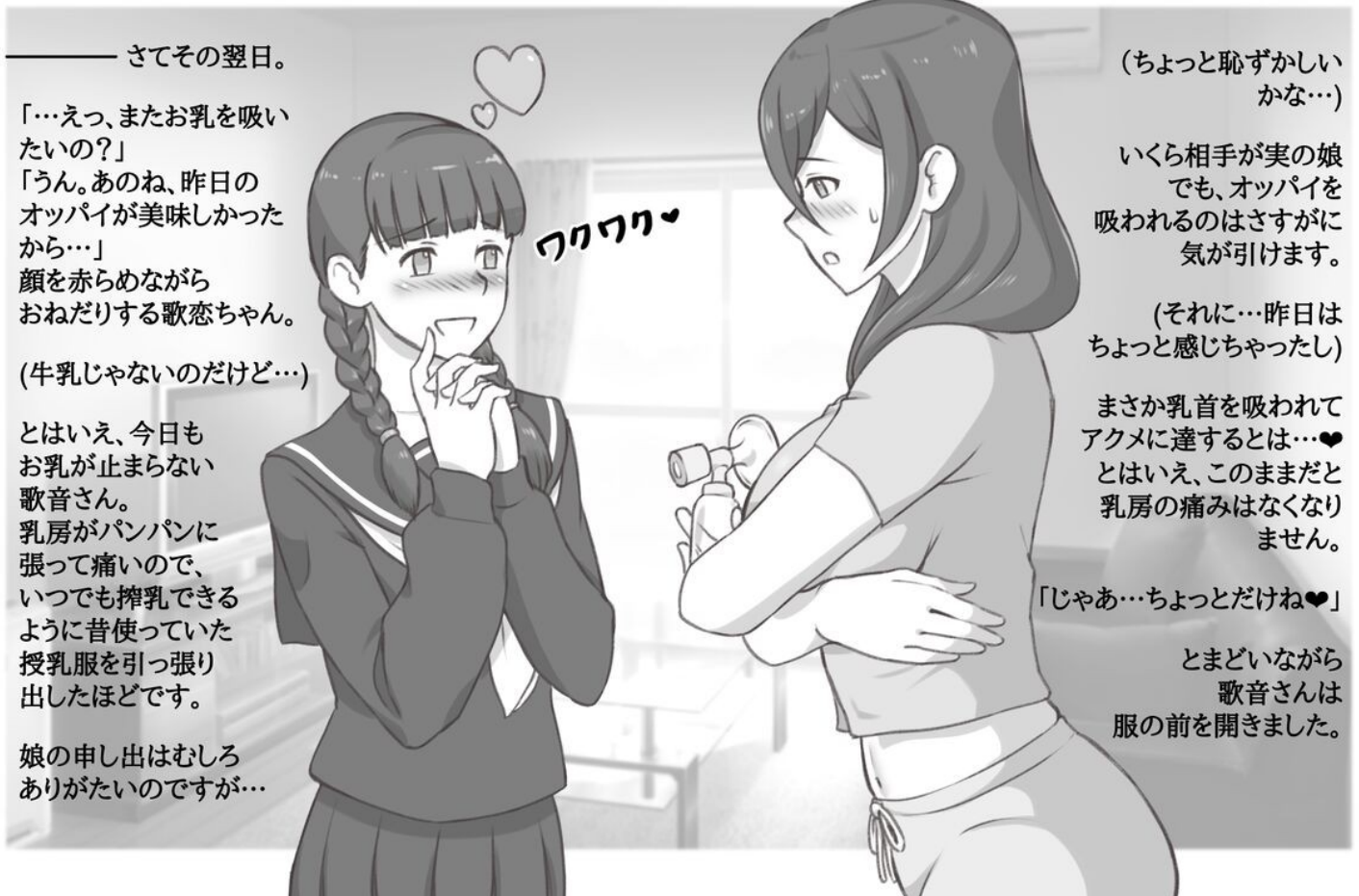
いくら相手が実の娘でも、オツパイを吸われるのはさすがに気が引けます。

(それに…昨日はちょっと感じちゃったし)

まさか乳首を吸われてアクメに達するとは…♥
とはいえ、このままだと乳房の痛みはなくなりません。

「じゃあ…ちょっとだけね♥」

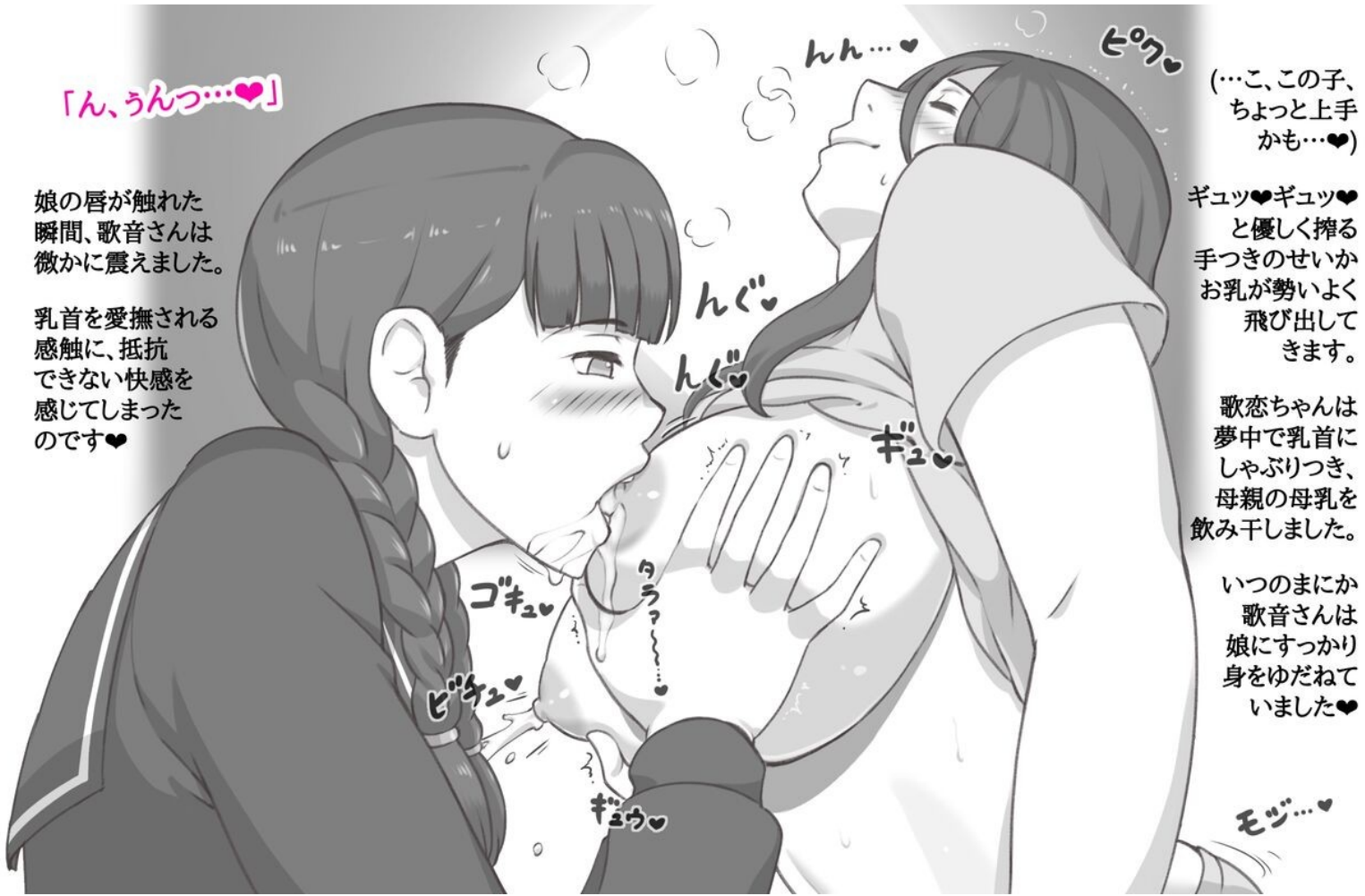
とまどいながら歌音さんは服の前を開きました。



「ん、うんっ…♡」

娘の唇が触れた瞬間、歌音さんは微かに震えました。

乳首を愛撫される感触に、抵抗できない快感を感じてしまったのです♡



(…こ、この子、ちよっと上手かも…♡)

ギョツ♡ギョツ♡と優しく搾る手つきのせいかお乳が勢いよく飛び出します。

歌恋ちゃんは夢中で乳首にしゃぶりつき、母親の母乳を飲み干しました。

いつのまにか歌音さんは娘にすっかり身をゆだねていました♡

モジ…♡

「あん……♥んう……♥」

(だ、ダメ……っ。娘に聞こえちゃう……っ)
次第に昂ぶってくる快感に、
歌音さんは必死で声を殺そうと
しました。
ただ授乳しているだけなのに、
乳首を吸い上げられるたびに
ピリッ♥ピリッ♥と
小さな電流が走る
のです。

それでも唇の
隙間から微かな
喘ぎ声が
漏れてしまう
のでした♥

…そんな母親の様子を
娘の歌恋ちゃんが
ジッと見ている。



(…ママの顔
色っぼい…
ピクッ♥可愛い…♥)

歌音さんの
上気した顔を眺め、
口中に含んだ乳首を
舌で舐め回し、
いつそう強く吸うのでした♥

赤ちゃんだった頃の歌恋ちゃんは
それはもう天使のように
可愛い子でした。

元気に自分の母乳を飲む
我が子を見ていると
シングルマザーの
辛さも忘れて
しまいます。

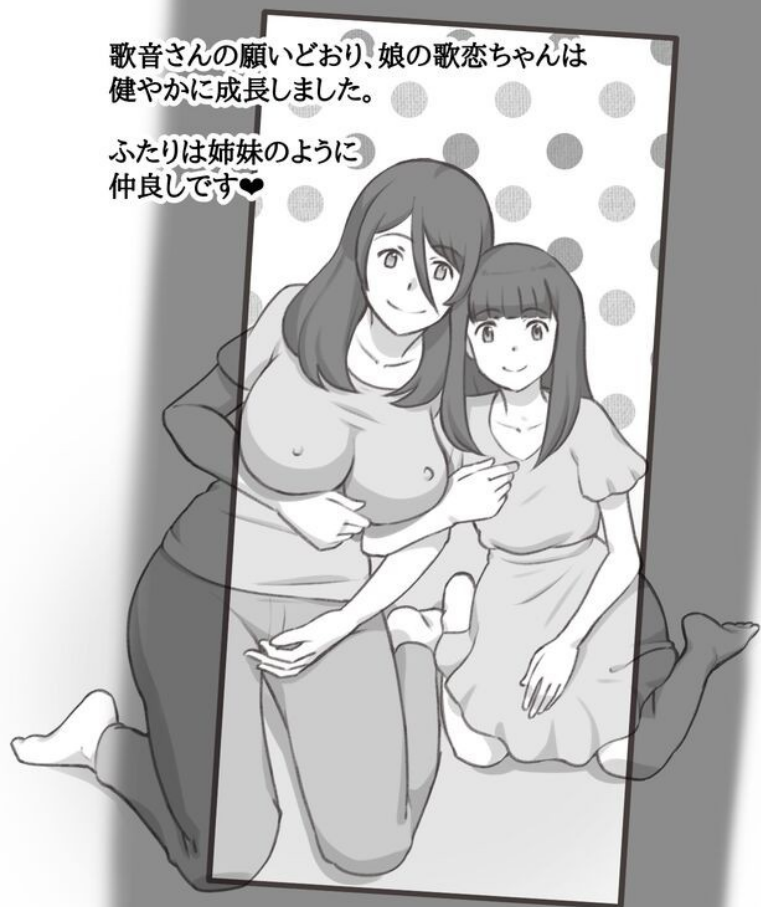
「いっぱい飲んで、
大きくなってね…♥」

赤ちゃんをあやしながら
そう呟くママさん。



歌音さんの願いどおり、娘の歌恋ちゃんは
健やかに成長しました。

ふたりは姉妹のように
仲良しです♥



歌音さんは娘可愛さのあまり、強く叱ったことは
一度もありませんでしたが、歌恋ちゃんは
そんな母親の人のよさにつけ込むこともなく、
反抗期もないまま、ママ一途でした。





そして、毎日自分の乳を吸ってくれる娘のことを自然に思い浮かべてしまうのです。

自分が実の娘に欲情していることを知り、ショックを覚えます。けれども指は一向に止まりません。

「ご、ごんなさい歌恋ちゃん…イケないママを許して…っ♡」

(あ…んう♡歌恋ちゃ…ん)

娘を学校へ送り出すと、歌音さんはいつものように搾乳を始めようとしたのですが、体の奥の疼きに耐え切れずオナニーを始めてしまいました♡

この頃は乳房に触れるだけで昂ってしまうのです。

(変だわ…こんなに…感じちゃうなんて…っ♡)



「ああ…歌恋♡」

謝りながら膣穴深く指を突き入れ、なまめかしい声を上げるのです…♡

一方、歌恋ちゃんにとって
母親の歌音さんは、
肉親であると同時に
憧れの存在でも
ありました。

物心ついた時から
母子家庭だったので
父親がいなくても
特に寂しいと思わず、
歌恋ちゃんは
歌音さんというだけで
満足していました。

たまにイタズラしても
気の弱い歌音さんは
娘を叱ることが
できません。

母親があまりにも
優しいので、かえって
歌恋ちゃんは反抗
できませんでした。

のみならず、同性として見ても
その可愛い容姿と
豊満な肉体は
まさに理想の女性でした。

母親を崇拜するあまり、
歌恋ちゃんは異性に
興味を持たない
自分に気づいて
いません。

なんとなく、
いつかは恋に落ちて
誰かと結婚する
のだろうな…
とは思って
いました。

ところが…



「こちらですね」
「ありがとう」
(…あら？この人…)
「…ママ、どうしたの？」

「ううん、ちょっとね。智慧ちゃん、
もしかすると近いうちにお友だちが
出来るかもよ」
「えっ？」
「そう、そうなの…うふふ♡」
「？」

「はあ… はあ… ママア…♥」

学校のトイレで歌恋ちゃんはオナニーに
ふけていました♥
母乳を飲むようになってからというもの、
なぜか母親の乳房を思い出すだけで
異常に昂ぶるのです。

(どうしてこんな…っ。
ああ…でももっと
ママのオツパイ飲み
たい…乳首しゃぶり
たい…ママの
恥ずかしがる顔
見たい…♥)

ん♥ は…♥

あ…あ♥

…そして、服の下に隠された
女体を想像するだけで、
もっと違うことがしたい衝動に
駆られるのです。

ママ…♥

は、は、♥

ピク♥

グキョ♥
ズキョ♥

ジツフフ♥
ソチニ♥

フル♥

(ママごめんねっ、
こんな想像して…
でも…あつ、イクっ♥
ママのアレを
想いながら
イツちゃううう♥♥♥)

ガタ

ガタ

「……あ、あ……♡
そこっ……♡もっど……
吸ってえ……♡」

ただ吸うだけから、
次第に乳首へ刺激を
与えるようになり

舌で舐め回したり
甘噛みしたり
強く吸ったり……♡

母親が感じるように
わざと愛撫するのです♡

日毎に歌恋ちゃんの飲乳は
過激になっていました♡

そのテクニックも
だんだん上がって
きました。

今でははっきりと
性行為を意識して
ママのオッパイを
いじくるのです♡

そんな娘に抵抗できる
わけもなく、歌音さんは
責められっ放し♡

「んぐっ♡……歌恋ちゃん
ママ、恥ずかしいの……
……あああ♡♡」

あ……♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡

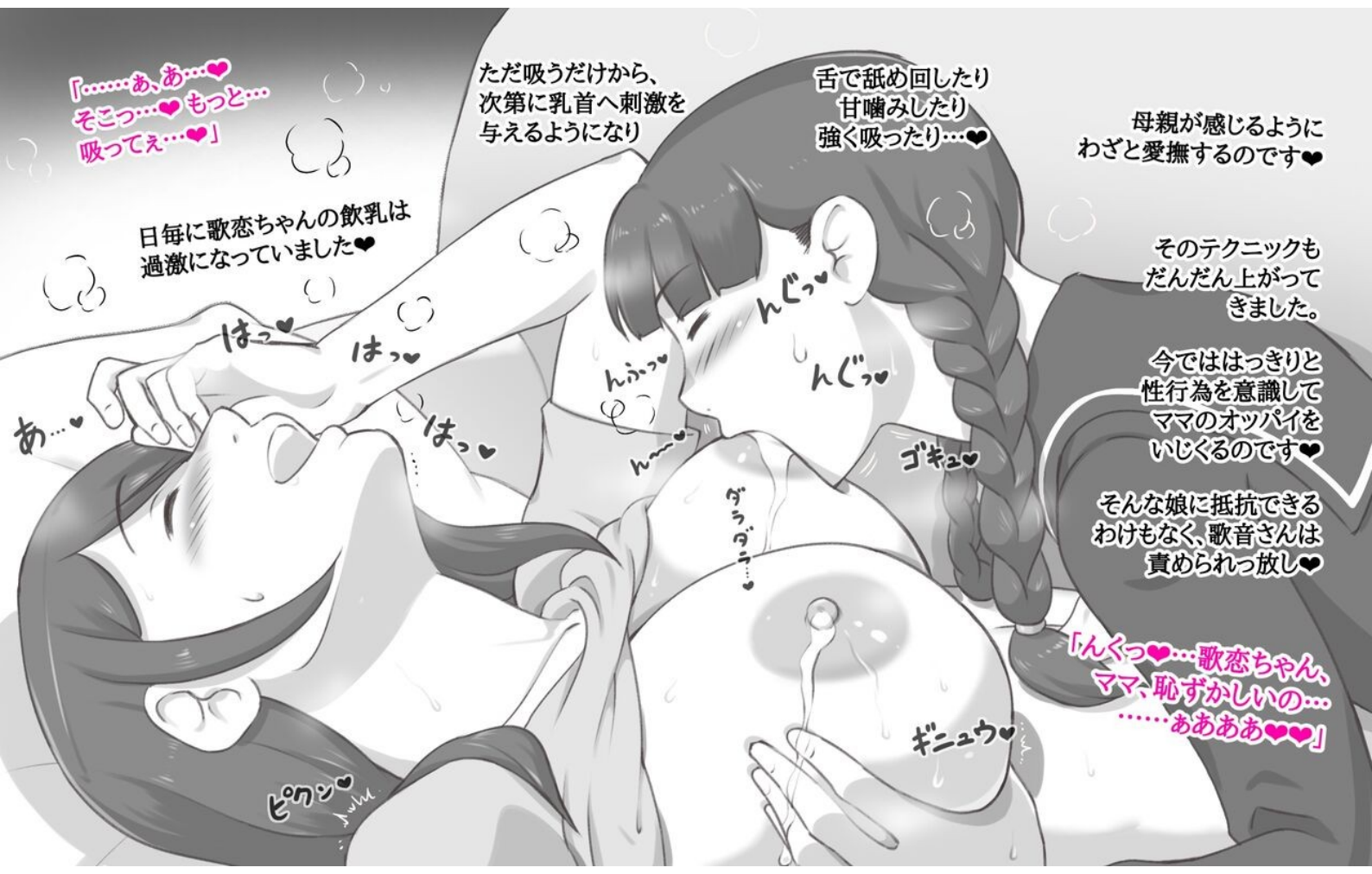
んじゅ♡
んじゅ♡
んじゅ♡
んじゅ♡
んじゅ♡

ゴキョ♡

ギニョ♡

ギニョ♡

ピクン♡



「汚れちゃうから」という理由で歌恋ちゃんは制服を脱ぎ、パンティだけの姿になりました。

まだ発展途上の薄い胸と細っそりした肢体があらわになります。

そして母親へ覆い被さると本格的に責めてきました♡

歌音さんは娘にされるがまま…

大きな乳房をチュウチュウ無心に吸う歌恋ちゃんを見ているとあらためて我が子への愛しさが込み上げてくるのでした♡





はあ♡
はあ♡

歌恋ちゃんは
ありとあらゆる
テクニックを
仕掛けて
きました♡

あうん...♡
い、痛いのに
気持ちいい...♡

グッ♡
グッ♡
グニユリ♡
グッ♡

ハミッ♡
キョウッ♡

あっ♡あっ♡
あっ♡あっ♡

チュウ♡
ギョウ♡

ムムムム...
ビチュッ♡
ビチュッ♡
ビチュッ♡

ビクッ♡

ゴク♡
ゴク♡

オッパイでママさんを
イかせたい一心で
乳首をなぶり
歌音さんを翻弄したのです♡

LO♡
LO♡

ネチョオ...♡

キョウウ...♡

「ママもお乳で服が汚れちゃうから、
脱ぎ脱ぎしようねっ…♡」

「あっ…か、歌恋ちゃん」

娘が歌音さんの授乳服と
スウェットパンツを脱がせます。
散々舐め回されて体の力が
抜けた母親は抵抗でき
ませんでした。

「うふふっ♪ やっぱり感じてたんだ～♡」

歌音さんのパンティは隠しようもないほど
股間がしとどに濡れていました♡
(もっとも、歌恋ちゃんのパンティも
同じくらい濡れ濡れです♡)

「歌恋ちゃん…ママ、恥ずかしい…♡」

羞恥に頬を染める母親に、実の娘は
ゾクゾクするような悦びを
感じました。

「知ってたよ、ママ。大丈夫、
わたしに任せて…♡」



「…うわ、ここ、グチヨグチヨだよ♡ どうしてこんなに濡れてるの…?」

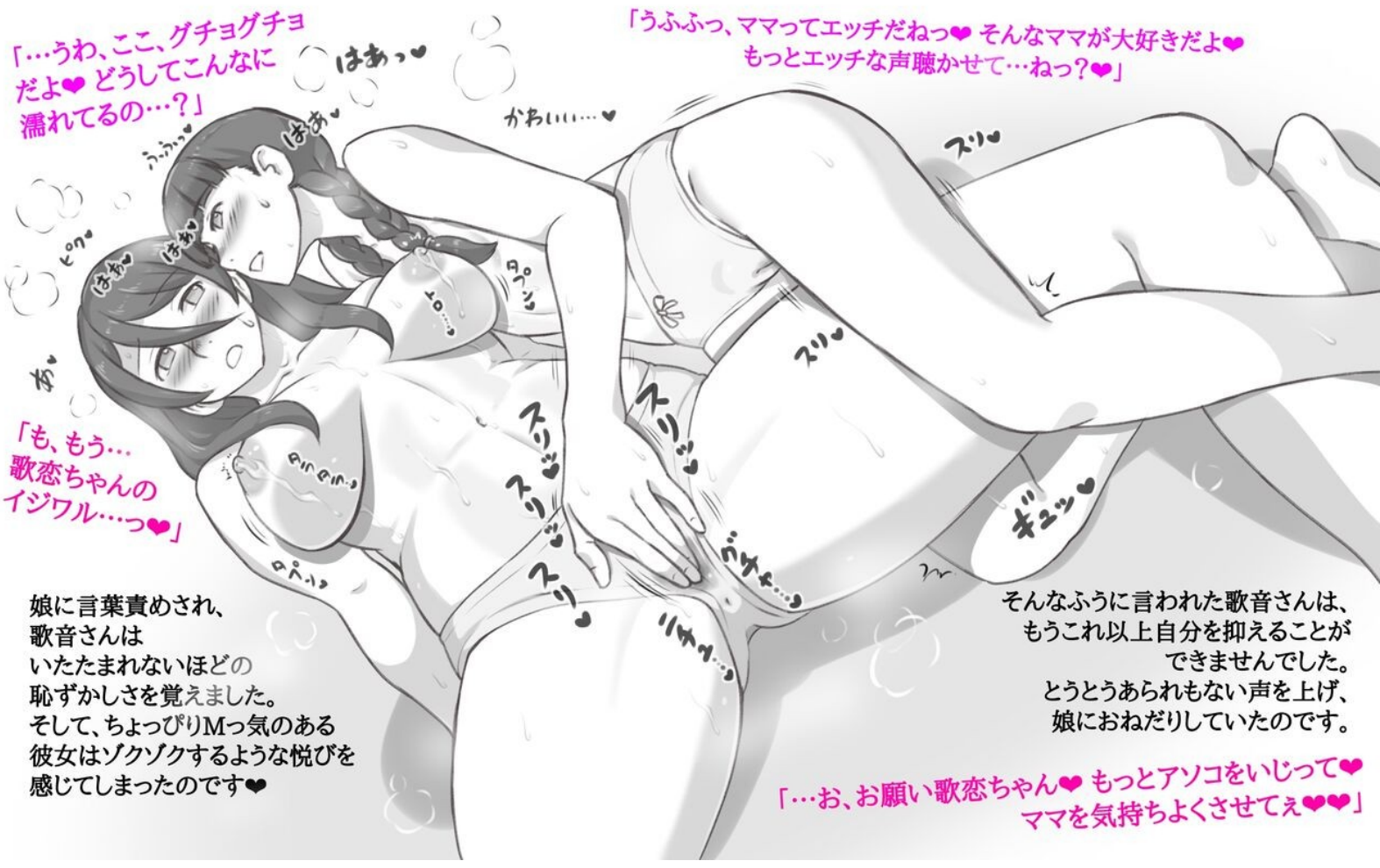
「うふふつ、ママってエッチだねっ♡ そんなママが大好きだよ♡ もっとエッチな声聴かせて…ねっ?♡」

「も、もう…歌恋ちゃんのイジワル…っ♡」

娘に言葉責めされ、歌音さんはいたたまれないほどの恥ずかしさを覚えました。そして、ちょっぴりMっ気のある彼女はゾクゾクするような喜びを感じてしまったのです♡

そんなふうに使われた歌音さんは、もうこれ以上自分を抑えることができませんでした。とうとうあられもない声を上げ、娘におねだりしていたのです。

「…お、お願い歌恋ちゃん♡ もっとアソコをいじって♡ ママを気持ちよくさせてえ♡♡」





「!はあああ♥
そこっ♥そこなの
おお♥♥♥♥」

膣口に指を入れられた瞬間、
歌音さんが歓喜に身を
震わせました♥

娘の繊細な指が
膣道を掻き回し、
掌でクリトリスを
こすってくれます。
中は濡れまく
っていました♥

ツボを心得た
少女の愛撫に、
母親は
これこそ
求めていた
ものだど
悟ったの
です♥

ニチャ♥

ニチャ♥

ビク

ブルブル...

キュンッ♥

「んんっ…ママん♥」

「んふっ…歌恋ちゃん♥」

歌音さんがイッた後、
長い余韻から醒めると、
ふたりは自然に唇を
重ねていました。
歌恋ちゃんにとって
ファーストキッス…♥



お互いの裸を見せ合い、
存分に痴態を晒した後、
もうふたりがためらう理由は
ありませんでした。

「これからも、いっぱい
いっぱいオッパイも
オマンコも吸ってあげる♥
大好きよ、ママ。愛してる…♥」

「わたしも愛してるわ、
歌恋ちゃん…♥
ママの体はあなたのものよ♥
たくさん愛して、ねっ…♥」

「ママ。誕生日プレゼントなんだけど...
う、受け取ってくれる...?」

「あらあら、今年は何をくれるの?
...まあ!？」

いつになく緊張した面持ちの歌恋ちゃん。

娘から贈られたのは、お揃いの指輪。
ピンクゴールドに輝くシンプルな物です。
その意味は「運命の絆・幸福・夫婦愛」...♥



ドキドキドキ...♥



歌音さんは、娘の気持ちが胸に沁みました。
嵌めてみると、あつらえたようにピッタリ♥

「ありがとう♥あなただと思って大切にするわ」
「...よかった!受け取ってくれて
ありがとう、ママ♥」

お揃いの指輪にしてから
母と娘の仲はますます
親密になりました♡

以前にも増して
ふたりで過ごす
時間が多くなり、
休日はデートに
出掛けることも
珍しくありません。

それは仲の良い
母娘というより、
親密な姉妹…
もつとはっきり
言えば恋人同士
のようです♡



握り合う掌から自然と
愛情が伝わり…

見つめ合う瞳は
時に淫らな色を帯びるのです♡

相変わらずお乳の張る
歌音さんですが、
もはや彼女は胸を治したいとは
思いませんでした。

(この子が喜ぶ限り、
もつともつと母乳を
与えたい…
わたしのお乳を飲んで
気持ちよくして欲しい…♡
わたしには歌恋が
必要なんだわ…♡)

(もっとママのオツパイ飲みたい…♡
いっぱい飲んでママをイカせたい♡
わたしの前で可愛く喘いで欲しい♡
エッチなママが大好き…♡
ママがいれば恋人なんていない♡)

「♡はあ…はあ…
歌恋ちゃん…♡」

「♡んっ…ママ
…あ♡」

ふたりの淫らな
性活は毎日
続いています♡

モッモッ…♡

ほっ♡

んふ♡

パログチュ♡

んん♡

ほふ♡

んっ♡

ギュッ♡

ギュッ♡

いまでは母娘セックス
なしでは一日も
いられません。

ほっ♡

ほひ♡

ふっ♡

母乳のしたたる乳首を
擦り合い、
舌と舌を合わせて
唾液を交換し…

ニユレリ♡

グニユッ♡

グニッ♡

女同士でできる
あらゆる行為を楽しんでいます♡
いつの間にかベッドもひとつになり、
朝から晩までレズ行為にふけるのでした♡



「ああ… マ、ママア…♡」

「歌恋ちゃんも気持ちよくなりましょう、ね…♡」

オマンコに口づけされ、歌恋ちゃんは喘ぎました♡
生まれて初めて誰かにクンニされたのです。
そのお相手は、自分の母親…♡♡

優しい舌使いに
震えながら、
歌恋ちゃんの
小さな胸は
歌音さんへの
愛しさで
溢れそう
…♡

「ママ、もっと
舐めて…♡
歌恋を
可愛がって
…♡♡」

ツワァ…♡

「んっ…ズツ♥ ママのオマンコお汁おいしい…♥」

「ぬるべちよっ…♥ 歌恋ちゃんのオマンコもとっても美味しいわ…んっ♥んっ♥」

初めて舐める娘の股間に歌音さんはすっかり夢中♥
実の娘をクンニするという背徳感もあり
震えるほど興奮しています♥

(なんてきれいで可愛い
オマンコなの…♥
もっと気持ちよくな
って、歌恋
ちゃん♥)

「あんっ♥…そ、そんなに
舐めたら歌恋イツちやう♥
逝くっ♥イクツ♥いくううう♥」





んあ♡

オ.オマンコ
こすれて気持ち
いい...しい♡

グチュ♡

マ.ママのオマンコ
気持ちいい
よおお♡

んあ♡
んあ♡

グチュ♡

可愛
ちゃん♡

ママ♡

グチュ♡

グチュ♡

グチュ♡

「…んぐっ♡んぐっ♡
ママオツパイおいしい
…っ♡♡♡♡」

母乳を浴びながら歌恋ちゃんは
うっとりしました…♡
華奢な体は乳液にまみれ、
恍惚に震えています♡
そんな娘を見ている
だけで、歌音さんは
アクメへ逝って
しまいそう…♡

一日中
レズセックスに
ふけり、痴態の限りを
尽くし、お互いの欲情に
満ちた肉体を堪能した後で、
もはやふたりは母娘の一線を
越えていました。

実の母娘は、もう本物の恋人同士です♡



「ママ、一生のお願いがあるのっ!!」

ある日、いつになく真剣な顔で歌恋ちゃんと言いました。

「お願い…って何かしら？」
「あのね、あの… も、もう誰とも再婚しないで欲しいのっ!!」
「え… ええ!？」

目をパチクリする歌音さんの前で、歌恋ちゃんは、いつまでも母親のそばにいたいこと、ふたりだけで暮らしたいこと、そしてなにより母親のオツパイを飲んでいいのは自分だけであることを切々と訴えたのです。

「わ、わたしがママを幸せにするからっ♡

エッチなことだって絶対満足させるっ♡

だから一生わたしと一緒にいてっ♡」

(それってプロポーズなんじゃ…)

もとより再婚なんてちっとも考えていませんでしたが、娘のあまりにも真剣な態度に(もう、この子と一生添い遂げるしかない…)母親である自分を選んでくれた娘に胸が痛くなるほど一途な愛情を感じたのでした。

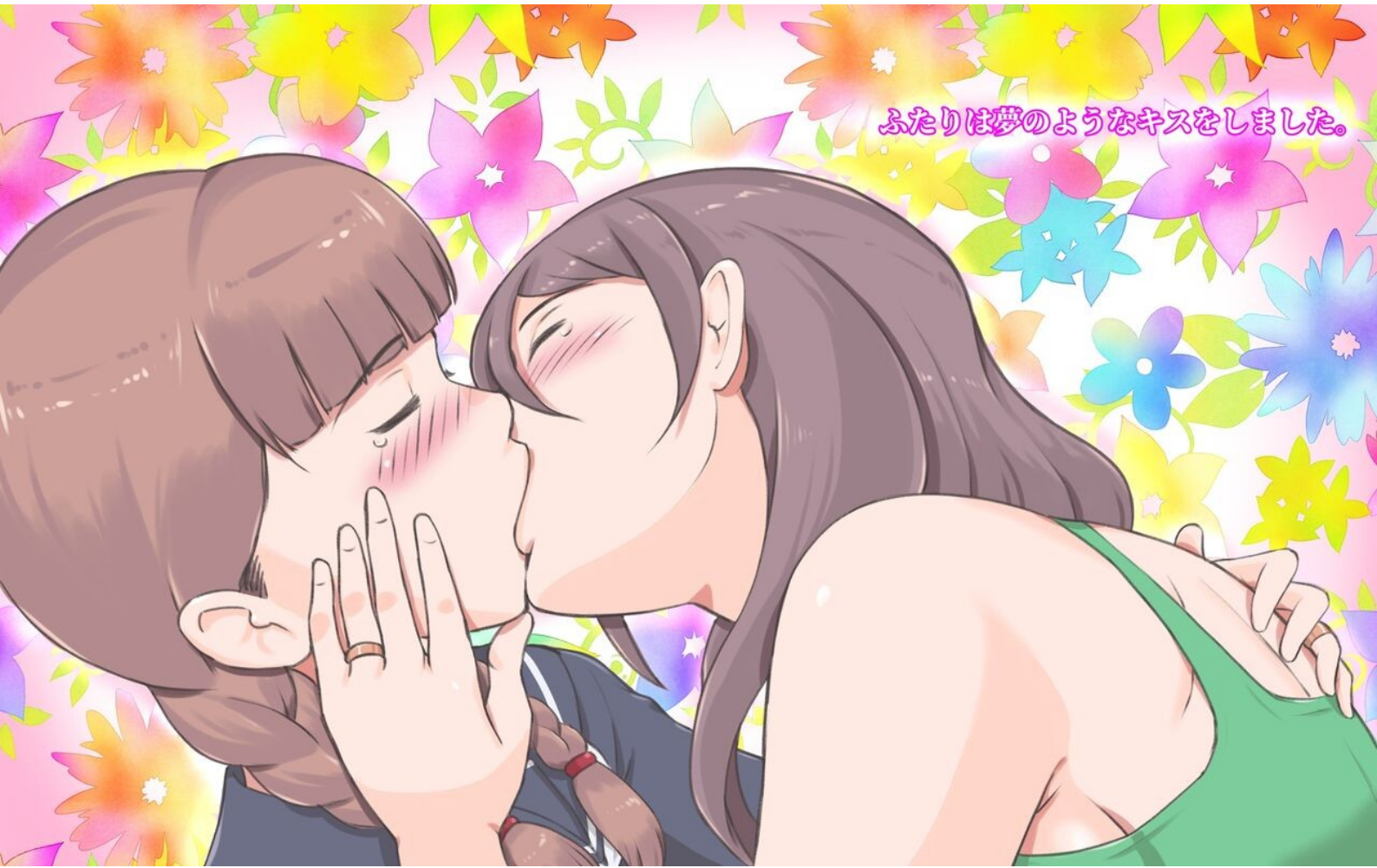
キュン♡

ドキドキ…♡

「…わかりました。ママは、歌恋ちゃんと一生一緒にいます…♡♡♡♡」



ふたりは夢のようなキスをしました。



「はあ…はあ… ママは、ずっとわたしのものだから…ね♡」

あれから毎日、歌恋ちゃんはペニバンで母親を責め続けています♡
最初はたどたどしい動きでしたが、今ではすっかりテクニシャン。
ママが喜ぶ箇所を知り尽くしています♡

「はい…ママは、歌恋ちゃんのもので…っ♡」

娘に征服される快感に目覚めてしまった歌音さん。

今では自分からおねだりするほど♡

ふたりは毎晩体を重ね、母娘セックスに没頭していました。もちろん母乳を搾るのも忘れません♡
射精がないぶん限度のないペニバンは何時間でも母親を犯せます♡

歌音さんは数え切れないほど絶頂し、歓喜に身を震わせるのでした♡

「歌恋ちゃん、もっとママを突いて…♡
もっと…もっと…
もっとお♡♡♡」





おく子宮口に届いてる...♡

娘に犯されて逝っちゃう...♡

ママは歌欠恋の女よ...♡♡

ズルルルッ♡
ズルルルッ♡

ズン♡

ズン♡

ズン♡

ズン♡

ズン♡

ズン♡

ズン♡

ブルン♡

ん♡

ほ♡

あ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡

ほ♡



そして、やすらぎの時間が訪れます。

ふたりの体の奥に激しく愛し合った余韻を残しながら…

(こんなに穏やかな想いがあったなんて…)

歌音さんは娘の静かな寝息を聴きながら
深い満足感にひたっていました。

(まるでこの子を産む前から

決まっていたみたい…

うん、きっとそう)

生まれて初めて心も身体も満たされ、
母親は実の娘と愛し合うことが自然で
あるように感じられたのです。

「おやすみなさい、愛しい子…♡」



「…え、『娘さんの子供を産みたい?』」

産婦人科の女医は
キョトンとしました。
そんな事をお願い
されるのは
初めてです。

「あの、噂で聞いたのですが、
先生は女同士で子供を作る
研究をされているとか…」

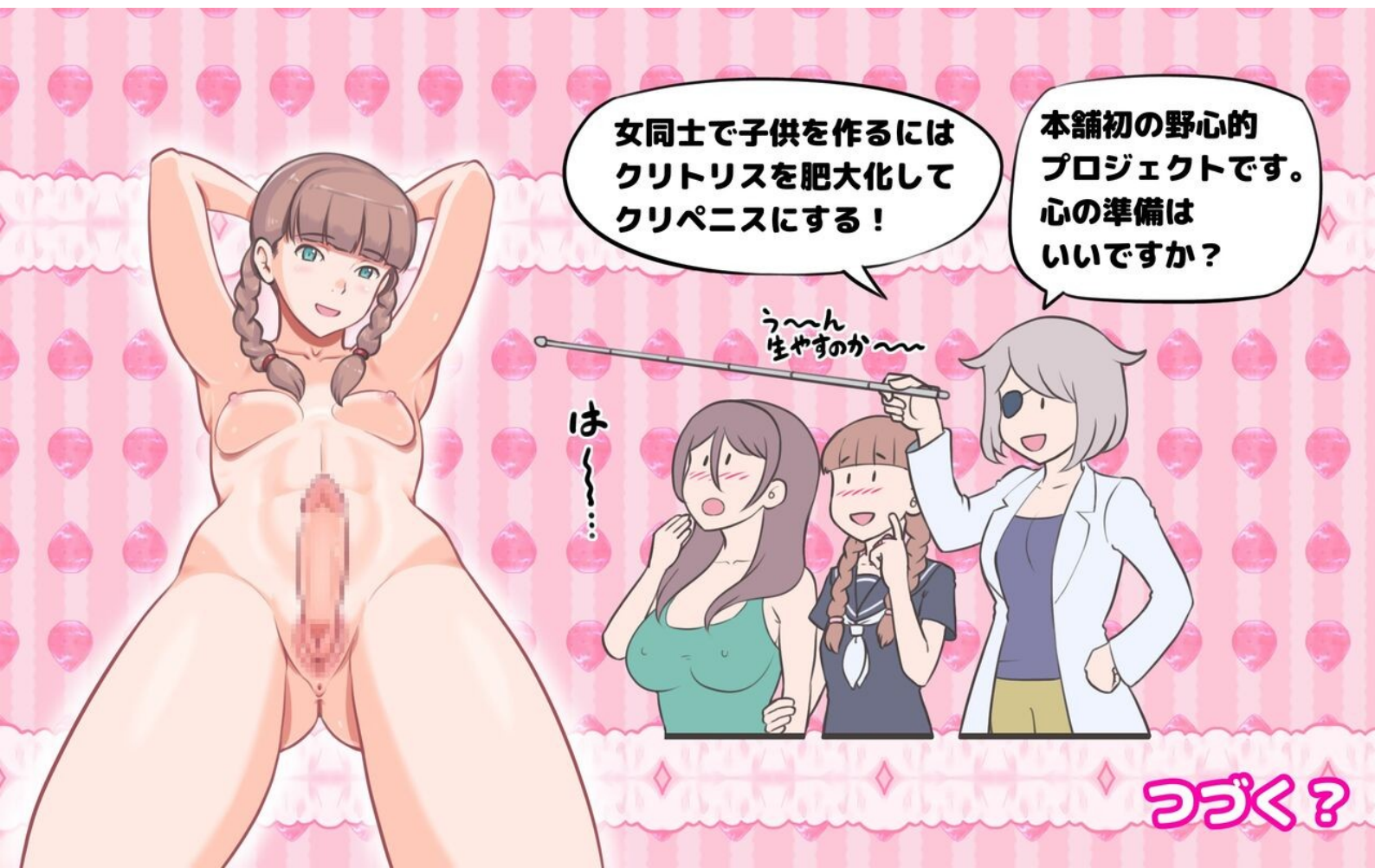
「…あ〜、アレですか。
いや、あれはまだ実験段階
で…」

すると今度は歌恋ちゃんが
「お願いします!
わたし、ママの子が欲しい
んです!」
真剣な顔で言うのです。

「私たち結婚したんですけど、
将来のことを考えると、娘に
子供を残しておきたい…♥」

(ふうむ。どうやら本気の
ようだね。そろそろ
始める時期か)
「…わかりました。
上手くいくか
どうか未知数
ですが、全力を
尽くしましょう」





女同士で子供を作るには
クリトリスを肥大化して
クリペニスにする！

本舗初の野心的
プロジェクトです。
心の準備は
いいですか？

う〜ん
生やすのが〜

は
〜
...

つづく？

